藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

地雷の国

六百年の栄華の跡をとどめるアンコール遺跡はクメール人の文化遺産であり、今、アジアの至宝として訪れる人の目を奪う。

しかし、近代カンボジアは戦争と内戦に明け暮れた。一八六六年にはフランスの植民地とされ、一九四二年には日本軍もカンボジアに侵攻した。第二次大戦後、曲折の末に独立国になったのは一九五四年のことだった。

その後も国は安定せず、ポル・ポトによる支配、ベトナム軍に支援された〝カンプチア人民共和国〟の誕生などを経て、内戦状態の終結はわずか十一年前の一九九八年だった。

この間、アンコール遺跡のあるカンボジア北部のシェムリアップ周辺や国境地帯にはたくさんの地雷が埋められた。現在も六百万個近くが埋められたままで、その撤去には百年かかると言われる。

悲しい話だが、カンボジアは地雷の国、今も毎日、何人かが犠牲になっている。

兵士としてたくさんの地雷を埋めた体験を持つアキ・ラ氏が個人的に作った地雷博物館を訪れた。

彼は五歳の時、両親をポル・ポトに殺されたが、そのポル・ポトに兵士として育てられ、十歳で銃を持たされた。

カンボジアがベトナム軍に占領されるとベトナム軍兵士に徴兵され、その後、カンボジア軍、国連平和軍などで働いた。

地雷を撤去するアキ・ラ氏（右）

彼の今までの人生をまとめた小冊子があるのを知り、借りて読んだが、彼というよりカンボジアという小国が東西対立や地域の強国の中で翻ろうされたことが痛いように伝わってくる。地雷はその中の一つの産物なのだ。

地雷博物館で、一九九八年に締結されたオタワ地雷禁止条約の存在を初めて知った。

日本も締結しているのだが、アメリカ、ロシア、中国といった大国が条約を批准してないという。こんなところにも大国のエゴがある。

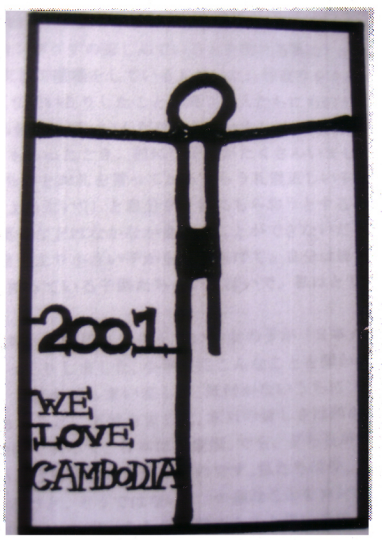
今回、カンボジア兵士時代に地雷で両足を失ったトゥン・チャナレット氏に会った。

彼は一九九七年に地雷廃絶国際キャンペーンがノーベル平和賞を受賞した際の共同受賞者の一人である。

カンボジアの貧しい人たちを支援する〝バッタンバンともの会〟発足の契機となった二〇〇一年の高校生のカンボジア訪問。そこで彼らは両足を失っても力強く生きるチャナレット氏に会い、強い感銘を受ける。それは彼らの体験報告書の表紙に描かれた「足のない十字架」によく表れているように思えた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

地雷で両足を失ったチャナレット氏



鉄製の「足のない十字架」